

---

# 罰あたり者の恋人

神田白兎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

罰あたり者の恋人

### 【NZコード】

NZ826

### 【作者名】

神田白兎

### 【あらすじ】

幼馴染みの家は神社。その「神体を、子供のころ壊してしまった梓は、罰があたつたのか、筋金入りの不幸体質で、幼馴染みの司にフォローされて過ごしているが……。 幼くて、拙くて、だからこそ精いっぱい心をこめて紡ぐ、二人の純愛。

## 0・恋の終わり

『とても仲のいい、一人の幼馴染みがいました。

一人はとても頭がよくて、正義感の強い子でしたが、もう一人はどうしようもなくわがままで、自分勝手な子供でした。

強くなろうとせず、困ったことがあればすぐに泣いて、誰かに助けられるのが当たり前で、誰かに頼るのが当然と思っているような子供は、もう一人の子供にいつも甘えて、頼つて、すがっていました。大好きな人に守つてもらつてばっかりな弱い自分を、何とも思つていませんでした。

幸いなことに、もう一人はそんな甘つたれでわがままだというのに、その幼馴染みが大好きでした。

「大きくなつたら、結婚しよう」という約束をするほどに。

だから、その言葉に甘え続けていました。

ある日、その甘つたれに罰があたり、大切なものを失い、不幸になりました。

そうして、二人の幼馴染みに4年の月日が流れました

「ぱぎやあーーっ！…」

緊張感が一切ない悲鳴？ が、食堂で上がった。悲鳴と言つか、奇声か雄叫びだな。これが悲鳴だとしたら、ホラーもサスペンスも怖くなくなる。

「梓、どうした？」

正直言つて全力で他人のふりをしどきたい声だつたが、そういうわけにもいかず、俺は奇声の発生源に尋ねた。

「…………司あ…………」

奇声の主、俺の幼馴染みの神薙梓は、食堂の手洗い場の前で今にも泣きそうな顔になつて、昼飯のカップ焼きそばを抱えていた。

「湯切りを失敗したのか？」

尋ねながら、手洗い場を覗き込んで見てみたが、中身は流しにぶちまけられていない。

「？ どうしたんだよ？ 何があつたんだ？」

悲鳴の原因がさっぱり分からず、再度俺が尋ね返すと、梓は涙目で呟いた。

「…………ソースが」

「ソース？ ……まさか、カップ麺の要領で、湯と一緒に入れたのか？」

梓はプルプルと首を横に振つて、俺の第二予想を否定する。

「こいつ、今日はいったい何をやらかしたんだ？」

「ソースが…………」

もう一度呟きながら、梓は、カップ焼きそばのかやくを取り出す。

「…………初めから入つてなかつた」

よく見ると、梓はかやくを一つ持つていた。

しばらく俺は、ゆであがつたカップ焼きそばと、一いつのかやくを持つて途方に暮れる梓をぼんやりと見つめ…、さすがに我慢できなくなつて、膝から崩れ落ちて盛大に笑つた。

「笑うなああつーーー！」

「何なんだよ！ 二つともかやくつてーーー！ 二つともソースなら、たいした問題じやなかつたよ！ いっそ両方入つてなかつたら、お湯を入れる前に気がついたのにーーー！ 両方がやくつて、何なのさー？ 私が腹ペこで待つた三分間を返せーーーー！」

どうもこいつは、焼きそばの中の袋をよく見ずに二つとも取り出し、湯切りしてソースをかけようという段階で、両方ともかやくという痛恨のミスに気がついたらしい。

……ミスつて言い方は、かわいそうか。今回はお前、何も悪くないし、注意して防げるもんでもないしな。

だからこそ、久々にツボつた。笑いが止まらねえし、横隔膜痛でえ…

「あー、もう！ 司、笑いすぎ！ ガンマ笑いすぎーーー！」

梓は相変わらず意味がまったくわからん新語を作り出しながら、食堂の長テーブルをバンバン叩いて怒る。

「…………悪…………い。けど、今回のはマジ…………ツボに…………」

あ、だめだ。目の前のかやくだけがやたらと多くかかつたカップ焼きそば見ると、ぶり返してきた。

「もーーいいっ！ 司なんて知らん！ 司の横隔膜なんて、引き千切れてしまえばいいーーー！」

地味に怖いセリフを吐いて、梓は完全ヤケクソで焼きそばをすすり出した。

「つて、おい！ それ食うのかよ！ 味なくて、まずいだろ？ おごるから、違うもん食えよ」

機嫌を直させるのも兼ねて、俺が提案するが、梓は麺をすすりながら言う。

「いい。食べ物は無駄にしちゃいけないもん」

まずそーに眉間にしわ寄せて、梓は味なし焼きそばを黙々食べる。  
……意地を張つてるんじゃなくつて、本当にそう思つていては知つてゐる。体調不良以外で食べ物を残したら負けと、こいつは昔からいつも言つてゐるから。

「いつも思うんだが、お前は誰と戦つてるんだ?」

苦笑しながら、俺は弁当からソーセージを一つ箸でつまんで、梓の皿の前に持つて行つた。

「ほら、口直しだ。がんばれ、あと半分」

一瞬前まで、すねて膨れつ面だったのが、満面の笑顔になつて、梓は口を大きく開けた。

「お前は鳥の雛か? そして俺は親鳥か? と思いながら、俺はその口にソーセージを放り込んだ。

「桜野クンと梓つて、付き合つてるの?」

近くの席でパンを齧つていた、同じクラスで、梓の友達の女子がそんなことを訊いてきた。

「ないない。私ら、ただの幼馴染みだよ」

梓は慣れた調子で否定した。中学に上がつた頃から、訊かれ始めてきたが、二年に上がつてからさらに訊かれるようになり、もう互いに照れるなんて可愛らしい反応はない。

あまりにもあつさりとした否定だつたからか、質問してきた奴は、調子が狂つたような苦笑いをしながらも、一緒に食べている女子たちとわらに訊いてくる。

「えー? でも二人つて、いつも一緒に学校来たり帰つたりしてるのは?」

「それにどつちも名前呼びだし、……ただの幼馴染みにしては仲良すぎない?」

「これも耳タコになるまで、言われてきたな。まあ、確かに男女の幼馴染みが小学生までならともかく、思春期真っ盛りな中学生になつても仲がいいのは、我ながら珍しいと思うけど。」

「私たちの家、お互に五分で行ける距離だもん。嫌でも、たいてい一緒になるよ。」

「呼び方だつて、今更変えるのも何か違和感あるからつてだけだしな」

何度も言つてきたことを交互に言つが、まだ何故か納得できないようだ。一人が、パックジュー<sup>ス</sup>をすすりながら、ぼそりと言つた。「じゃあ、桜野クンが梓の不幸の世話すんのも、幼馴染みだから?」「弁当食つてた手が、その言葉で止まる。

自分の顔が強張るのを感じながら、俺は答えた。

「それは、……あまり関係ない。……俺の責任だから……」「

俺の「責任」と言つ言葉に、好奇心が刺激されたらしく、質問してた全員が、椅子を動かして身を乗り出して、……無責任に目を輝かせた。

「え? 何々? 何の話?」

「責任つてどういう意味? 何があつたの?」

「司のせいだ、私、天罰が当たつちゃつたの」

質問に答えたのは、かやくだけを振りかけた焼きそばを完食した梓。

「天罰?」

誰かのオウム返しに、梓はペットボトルの茶を飲み干してから、頷いた。

「そー、天罰。司の家つて神社でさ、四年くらい前に、神社の……社つていうのかな?」

まー、ともかく中に入り込んで遊んでて、私がその御神体の鏡をね、何気なく手の取つた時、いきなり司がふざけて私の髪を引っ張つたの。それで私は驚いて、思わず鏡を落として割つちゃつたんだよ。あー、思い出したら腹立つてきた!! 司のテラマックス禿げーー!!」

「禿げてねえよ。理不尽な罵りをすんな」

「つか、どうでもいいが、すげー眩しそうな禿げだな。」

俺のつっこみも、周りから向けられる奇異の視線もモノともせず、梓はまた机をバンバン叩きながら叫ぶ。

「その日の夜に高熱出してから、私はずっと不幸！ テスト範囲は毎回の「」とく間違えるし、たまには外で弁当食べようと思つたら、カラスに襲われる！ 買つたばかりのシャーペンの替え芯が、何故か全部中途半端な長さで折れてたこともあつた！！！」

周りのクラスメイトだけではなく、全然関係ない奴らも噴き出したのが聞こえた。

……ああ、そういうやあつたな。そんな事。しかもそれ、テストの直前に買ったやつだつたんだよな。

さらに梓はヒートアップして、自分の不幸体質を焼きそばすつていた時以上にやけくそでアピールしだす。

「最悪なのが、昨日…！ 学校来たら、下駄箱にラブレターが十通くらい入つてた！！」

「……それは、むしろラッシュキーじゃないの？」

きょとんと、もつともなことを梓は友達に言われたが、ジト目になつて事の真相を語る。

「 全部、私宛じゃなかつた。全部間違い。しかも、どうやって間違えたのか、あて名は全員違つ！ 上下左右の下駄箱の子と間違えられたとかじやなくつて、クラスどころか学年違つ奴も多数！！ ねえ、これは私が不幸なの！？ それとも、出した奴が不幸なの！？ そしてそのラブレターは、返しておぐべきだったの？ 律義に、宛名の下駄箱探して返してたら、ホームルーム遅刻したし…！」ハイテンションで自分の不幸を語りまくる梓だが、はつきり言つて誰一人として同情していない。むしろ爆笑の嵐を起こしてゐる。…見方を変えたら、こいつは不幸なんじやなくつて、笑いの神に愛されてるんじやないのだろうか？

「あー、やばつ、おなか痛い！ おかしそう！ あんたいつもダメだなーって思つてたけど、確かにそれはドジと言つより不幸体質だわ」

「直美！泣くほど笑うな！ どいつもこいつも他人事だと思って、爆笑しやがって！！」

またすねて膨れ始めた梓の機嫌直しに、今度はアスパラのベーコン巻きを口に放り込む。

「まあ、傍から聞くと楽しいが、毎日似たようなことがおこつたりや、うんざりしてくるよな」

「そーだよ！確かにさ、重くて暗くて洒落にならないうな不幸じゃないけど、毎日起こつてたらもう、ストレスたまつぱなしだよー！」

フォローのつもりで言つたセリフが逆効果を起こし、アスパラを食いながら梓はキレた。

「うわーん！ 司が原因なのに、何で私が天罰受けなきやなんないのー！ 司のせいだー！ 司のメタメタ馬鹿あー！」

動物にやたらと嫌われるのも、ボールから上がろうとして、飛び込み台の取つ手の部分掴んだら、その取つ手が取れたのも、公園から飛んできたボールを珍しく避けたら、今度はプラスチックのバットが飛んできてそれにあつたのも、失恋した姉ちゃんにハツ当たりされるのも、弟にバカ呼ばわりされるのも、母さんが通販で要らん買い物するのも、父さんの足が臭いのも、全部司のせいだーーー！」

『後半は不幸関係ない』

俺だけじゃなく、周りの奴らがほとんど全員ハモつて突つ込んだ。

## 2・友達以上恋人未満＝保護者？

放課後、トイレ掃除当番の梓を教室で待っていたら、今度は俺の友達が訊いてきた。

「なあ、司

たいき

「ん？ 大樹か。何だよ」

「お前つて、帰宅部だよな？ ……何で毎日そんなに荷物が多いんだ？」

うちの中学校の指定鞄はリュックとボストンの二種類で、テスト期間や短縮授業などで、午後の授業がない場合以外は、リュックだけで学校に来るのは禁止。

今日のうちのクラスは、体育もないし、クソ重い資料集やら辞書を使う授業もないのに、たいていの奴はボストンもしくは、校則違反でリュックしか持つて来てない。

その中で、帰宅部だつていうのに、ボストン・リュック両方ともパンパンな俺は確かに目立つし、気になるだろうな。

「ああ、嫁の為だよ。神羅の為だよなー、司ちゃん」

梓には負けるが、小学校からの腐れ縁（ちなみに、俺にとつてこれは友達じゃない）が説明した。つーか、梓は嫁じゃねえよ。神羅の為？ あの、歩く衝撃爆笑映像の為に、この大荷物？ すげえな、司

……梓、お前はお前の知らない所で、この上なくぴつたりなあだ名が付けられてるぞ。

「なーな、その中、何入れてるんだよ？ 前から少し、気になつてたんだ。見せてくれよ」

大樹は言いながら、俺のボストンを持ち上げて、中を開けようとしました。

「…？ やめやつ…！」

ひつたくるように俺はボストンバックを奪い返し、俺の剣幕と勢いに押され、大樹は尻もちをついて、倒れてしまった。

「あ…、悪い。けど、鞄の中を勝手に見るのはやめてくれ。見たいのなら、見せるから」

謝つて、倒れた大樹に手を貸すと、大樹も反省してくれたらしく、「いや、俺が悪かった。マジで」「めん」と謝つてくれた。

「…お前つて本当に嫁のことになると、性格変わるよな」

「今林、嫁じやねえつて、何度言つたらわかるんだよ」

呆れて、バカにするように言われたのが気に障り、俺が睨みつけながら言い返すと、今林の奴はにやにやしながら、昔話を掘り返した。

「えー？ お前ら、『大人になつたら、結婚する』つて、いつも言つてたじやん。小学校の頃から筋金入りの馬鹿ツプルが、今更照れるなよ

あ、そっかー。神薙は嫁じやなくつて、旦那つて意味か。可愛い可愛い司ちゃんの方が、フリフリなエプロン似合いそーだしな」  
わるかつたな、フリルが似合いそうな女顔で。家の神社でも、年末年始や祭りの時、女手足りねーからつて、巫女の格好してんのがそんなに面白いなら、一生言つてろ！

あと、「結婚する」とか言つてたのは、小学校の頃からじやなくつて、小学生の頃はだ。そんな約束、梓は覚えてない。

もう、とつぐの昔になくなつた約束を、俺をからかう為に口に出すんじやねえ！！

「…えーと、司あー。さつき持つてみた時、かなりボストン重かつたけど、この中マジで何入れてんだよ」

喧嘩になりそうな空氣の間に、大樹がおどけて割つて入る。

大樹の目の前で喧嘩するのも気分が悪いし、何より喧嘩の最中に梓が掃除を終えて帰つてきたら、かなり面倒なことが起こるので、ここは大樹に感謝して、俺は今林を無視して鞄を開けた。

まず最初に出て来たのは、うちの学校のジャー・ジ。それから、タオルが一枚ほど。ハンカチ代わりのハンドタオルじゃなくつて、汗などを拭くフェイスタオル。：本当は、バスタオルを持ち歩きたいところなんだけどな。

「……もう一度確認するけど、司って帰宅部だよな？」

帰宅部です。間違いなく。

「あいつよく、水を頭からかぶったり、ワックスかけたばかりの所で滑つて転んで、ワックスまみれになつたりして、制服汚したりするんだよ。ついでにほら、濡れたり、汚れて洗つた服や髪を乾かす用に、ドライヤー」

「……歩く衝撃爆笑映像の名を舐めてたわ、俺。これを常備させるほどかよ。」

これだけで驚いてたら、まだまだ甘い。梓は、ジャージに着替え

てすぐにまた汚す羽目になるのも珍しくないぞ。

あと 靴 靴もよくなくすんだよ。犬に追いかけて逃げた時

『昔のマンガかつ！！』

大樹だけじゃなく、今林も突っ込んだ。つーか何でまだいるんだよ。お前は部活だろ？ 早く行けっつーの。

## 「それから、カロリーメイト」

「ああ……、そういうや先週の四限目の移動教室で、次は昼休みだからって弁当を机の上に置いてたら、体育のクラスのホームランボー  
ルが窓割つて入ってきて、神羅の弁当に直撃して、えらいことにな  
つてたよ。」

大樹は遠い目をして言った。

いや、お前はこの状況で、三秒ルールを適用させる気か？ ガラスまみれで、床にばらまかれて落ちたのは、どうでもいいのか？

と、小一時間問い合わせたかった。

「あとは、裁縫セットと、よく怪我もするから、救急箱」

「あー、それは絶対いるな。……って、でかつ！ 裁縫セットは普通に持ち運び用だけど、救急箱つて本当に救急箱かよ！！」

「でも、包帯と絆創膏、あとは小さなオキシドールくらいがセットの、遠足や旅行にでもあれば便利なサイズを想像してたようだが、俺が出したのはマジ本物の救急箱。包帯や絆創膏は各種大きさを取りそろえて三箱くらい入れて、火傷の薬、かゆみ止め、虫よけ、胃腸薬、下痢止め、風邪薬に解熱剤などもしつかり入ってる。さらには、いざと言う時の為に、梓の保険証のコピーも入れてある。

「ま、こんなもんか」

だいたい見せれるもんは見せて、全部しまい直す。

「……司、お前すごいよ。神薙がお前の嫁つて言われても、仕方がないよ。って言うか、嫁相手でも、ここまで用意できねえよ」

大樹は本気で感心したような溜息をついて言つ。今林と違つて、からかつたり、厭味のニュアンスが全くないから、こいつの言葉は素直に受け取れる。

「褒め言葉として、受け取つておくよ」

「何、かつこつけてんだよ、お前。やっぱりお前、神薙のことが好きってことだろ？ いい加減、認めろよ」

今林がまた、うつとおしいことを言つのにムカついて、振り返つて睨みつけるが、その奥の廊下をびしゃびしゃと歩く人物に、俺の意識は全部持つてされた。

「梓！？」

「……あー、司あー。またやつちやつたよ」

全身濡れ鼠になつて、『まかすように笑つてる梓に駆け寄つて、ボストンを漁つて、とりあえずタオルを頭にかけてやる。

「どうした？ 何があつた？」

「ホースの中に何かが詰まつてたらしくて、水が出ないなーと思つて、蛇口思いつきり捻つたら、……ホース外れて私に思いつきりか

かつた

予想通りだつた。ベタな奴。

「なーんだ。便器に頭から突っ込んだのかと思ったのに。歩く衝撃映像なら、それくらいやれよ」

「！ 今林つ！！ てめえ、いい加減にしやがれ！！」

初夏になつてきたとはいえ、今はまだ五月だ。ただでさえ、トイレからびしょ濡れで教室に帰つてくるのは、滅茶苦茶恥ずかしかつただろうに、ここまで濡れたら、かなり寒いはずだ。

傍から見れば、笑えるのはしょうがないが、本人にとつては最悪なんだ。

……何で、何でお前何かを笑わせる為に、そんなことやらなくちやいけないんだ！

「あ？ 何だよ、司？ やるのか？」

ああ。何でもやつてやるよ。喧嘩でも、殴り合いでも。

「……今林」

頭に血が昇つた俺を制したのは、びしょ濡れの梓。

梓は、タオルでとりあえず頭を拭きながら、俺を制して、今林の前に立つた。

「！ ……何だよ、神羅」

少しひるむ今林を、まっすぐ睨みつけて梓は、まずは大きく息を吸つて、そして一気に言った。

「この、ブサイクブサイクブサイクブサイクブサイクブサイクブサイクブサイクモザイクブサイクブサイクモザイク！」

「！」

噴いた。

俺だけじゃなくつて、大樹や他に教室に残つてる奴らや、廊下に通りかかつた奴さえも。平たく言えば、梓と今林以外の全員。

「ちょっと待て！ 今、さりげなくモザイクが混ざつてたぞーー！」

「モザイクが必要なぐらい。お見せできませんな顔つて意味だ！」

「この、顔面放送倫理規制！！ もう少しでお前、出版倫理規制にも

引っ掛けたぞ！…

どんな顔だ？

梓は今林にびしつ！と指さし、さらに俺らを笑わせたいとしか思えない罵倒を続けた。

「便器に頭突つ込め？便器の中身みたいな顔してるお前が、中に入つて流される！それが嫌なら、さつさとまつたく似合わないサッカー部に行つて、『俺の顔面がゴールネットです』って言つて、ボールを全部顔面に受けて、整形して来い！」

だからどんな顔だよ！…ダメだ。笑いが止まらなくて、突つ込めねえ。もう、周りの奴らみんな、腹抱えて、声すら出ないくらいに笑つてんじゃねえか。

俺と腐れ縁ということは、自動的に梓とも腐れ縁である今林。こいつとの口喧嘩では、何か色んな意味で勝てないことはよく知つてから、顔を真つ赤にしながら慌てて教室から出て行つた。

「まったく。言い返せないなら言わなきやいいのに。小学校から、本当にあいつ変わんなくて、嫌になる」

「……お前の返しは、さらにキレがよくなりすぎなんだよ」やつと話せるくらいに呼吸が整つたので、口を出す。あそこまでマシンガントークで言われて、誰がどう返せと？

「そう？ 姉弟いたら、これくらいの口喧嘩、日常茶飯事だよ？」

お前のうちの口喧嘩は、相手を笑い死にさせるのが目的なのか？

「あとでー、サンキュー、司。怒つてくれて」

さらりと、ついでのように軽く自然に、梓は笑つて言つた。

ただ怒つただけの俺、何もできなかつた、できたとしても、余計に面倒にさせるだけの俺に、彼女は礼を言つた。

「……なあ、やっぱお前ら、付き合つてんだろ？」

大樹がものすごい呆れた声を出して訊く。

「断じて、違う！…」

さすがにこの状況は照れ臭く、やけくそで叫ぶ。

「梓！ さつさと着がえろ！ バカは風邪ひかないとは言つても、

濡れ鼠になつた事情がバカだから、引くかもしれないし

「何だそれ！？ メタボリック失礼だな！！」

「お前はメタボの意味わかつて言つてんのか！？ いいから、ほら

！」

俺はジャージと大樹には見せなかつた黒いビニール袋を渡して、梓の腕をつかんで引っ張つて、着替えができる場所を探しに出てくる。

正直に言つと、教室から逃げただけだつたりするけど。

これ以上教室にいてられるか！

梓の親に頼まれてるからつて、こうじうびしょ濡れになつた時のために、下着まで持ち歩いてるなんて知られたら、俺はたぶん死ねるぞ！！

### 3・君がわからない

「ねー、司」

「何だ?」

「なんで司はさ、いつも私に付き合ってくれんの?」

いつもの帰り道の河川敷で、いつも雑談のように、梓は訊いた。  
何気ない、ふと気になつたから尋ねただけの質問のはずだ。

……けれど俺には、「邪魔だ」と言われたような気がした。  
存在を否定された気がした。

「理由がなくちや、いけないものなの?」

尋ね返した声が、怒つているような声でもしろ安心した。

氣を抜けば、泣いてしまいそうなくらい、その問いかけは俺を突  
き刺したから。

「理由がなくちやいけないとかじやなくて、理由がなくちやおかし  
いじやん。こんな、面倒ばかりかける奴の世話を、毎度毎度焼く  
なんて」

梓は、呆れたように言つ。

俺に、言い聞かせるように言つ。

「別に、司が責任を感じなくてもいいんだよ。天罰天罰って言つけ  
ど、そんなのその場のノリで言つてるだけで、私は全然、そういう  
の信じないし。仮に本当にそうだとしても、洒落にならなによつ  
なことは起こつたことないんだし。

……司が、面倒だつて思うんなら、いつでも勝手に見捨ててよ。  
私は図太く、生きていけるからさ」

そう言つて、笑つた。

運動部でもないのにジャージ姿で、腕や足にはいつも生傷が絶え  
なくて、カツプ焼きそば一つ食つのにも、奇跡的な不幸を生みだし  
といつこつは、笑顔で俺に、「自分を見捨てる」と言つた。

「……馬鹿か、お前は。いや、もつお前は馬鹿かじゃなくって、馬鹿だ。正真正銘の大馬鹿だー。」

鹿だ。  
正真正銘の大馬鹿だ！」

「なつ！？ ひ、人が氣を使つて言つたのに、馬鹿と断定！？ 馬鹿なのは司の方でしょ！ この超絶お人好し世話焼き才色兼備！！」

「罵倒か褒めるかどつちかにしろ！」

それに、超絶お人好しはお前の方だろう。

俺の過保護がひとつと拂してからじやなくて、

作の道徳感がうるさいからだ。だが、今、作が責任感につれてることに、お前が気にかけるんだよ？

「梓、逆に聞くが、もしあ前と俺の立場が逆なら、お前は俺を見捨

出来ない！！

お龍に出来ないことを、俺にせらせておうとするな！ 天罰も、責  
任も隸屬などない。お前の仕話を窺くのが、俺の意志だ。

いまさら見捨てるなんて、後味悪い」とやうせんの一言。

……なんで、泣きそうな顔になつてゐるんだよ？

責任を感じなくていい？ ふざけるな！！

これだけは、俺のものだ！

「責任」が「お前のせ語る炮」で「轟き」が「作力」のものにさせてくれ。

俺は、これに縋つてしか、生きていられないんだよ。

「はあ？」

唇を噛みしめて、俯いたまま梓は叫んだ。

「ほの黒鹿!! ほにせ!! ほせわかななし!! ほせわかななし!!

てなかつたの！？ 司の…………司の…………司のスーパー デラックスギヤ

ラクシービックバンオメガ朴念仁ーー！」

頭が素晴らしい悪いとしか言えない罵倒を残して、梓は走り去る。が、十メートルも走らないうちに、風で転がってきたスーパーのビニール袋に足を絡ませてこけた。

「梓！」

俺はすぐに駆け寄るが、俺がたどり着くよりも早く、梓はさっさと立ち上がる。

そして、俺を見据えていった。

「……私は、一人で立てるよ」

「……梓？」

お前は何が言いたいんだよ？

わからない。わからないよ、梓。

お前は、俺に何を知つてほしいのか、俺には全然わからないよ。教えてくれよ、梓。

俺は何を知れば、お前のそばにいられるんだ？

「私は、司がいちいち面倒見なくとも、平氣だもん。司が、ずっとそばにいなくても、大丈夫だよ。

……だからさ、司」

彼女は、泣き出しそうな顔で、優しく微笑んだ。

「私を、見捨てなよ」

懇願とも、命令ともとれる言葉を残して、梓は走つて行つた。今度は、こけなかつた。

「……梓？」

その背が見えなくなるまで、その場に立ち尽くした。

何も、本当に何もわからない。

どうして、あいつがいきなりこんなことを言い出したのかも、あいつが何を望んでいるのかも、どうしてあいつは、自分が一番辛そうだつていうのに、笑つて俺に「見捨てろ」なんて言ったのかがわからない。

わかるのは、たつた一つ。

梓には俺が必要不可欠だと思つていたのは、ただの自惚れだつた  
ということだけ。

俺は、四年ぶりに泣いた。

次の日の昼休み、大樹に訊かれた。

「司、お前さ、神薙とケンカした？」

この質問は、本日七人目。……そんなに俺らはわかりやすいのか?  
つて、聞くまでもなくわかりやすいか。今、梓とではなく大樹と  
昼飯食つてるのが、いい証拠だ。

「……ケンカ……なのかなあ？」

弁当を半分以上残して、箸を置き、呟いた。

ケンカなら日常茶飯事だ。けど、昨日のはいつたい、なんて言え  
ばいいんだろうな？

一方的に、梓に俺のしてきたことを否定された。

でも、梓自身がひどく傷ついていた。

言いたくないことを言つて、自分で自分を傷つけて、それでも、  
あいつは笑つた。

あいつが、何をしたかったのかはわからない。

何度ももう一度話し合おうと、俺は何をわかつていなかを尋  
ねようとしたけど、梓は俺の相手をしようとしなかつた。

いつもより早く家を出て、どんな不幸で傷ついても、自分でフォ  
ローしていた。

……俺なんて、いらないと言つよつ……

「……俺、梓に嫌われてんのかな？」

「ありえねえよ

俺の心の底からの不安を、大樹はパン食いながら、即答で否定し  
た。

「えーとな、司。俺はさ、お前とも神薙ともまだ一ヶ月くらいの付  
き合いだけど、それだけは自信持つて否定できるぞ。

神薙はお前のこと嫌いなんて、絶対にあり得ねえよ

……どうして、そう言い切れる？

俺にはわからないと言われたのに、最初から見捨ててほしいうて言われたのに、それなのに梓が俺を嫌つてないなんて、どうして大樹が言い切れるんだ！？

俺はずつとずつと、梓と一緒にいたのに！！

「まー、確かに今日の神薙は、司に全然頼つてないけどさ、……でも、よくよく思い返せば、神薙つて自分からお前に頼つたり、助け求めたりしたことないじゃん？」

なんつーか、今日だつてお前を避けてるつて言つより、……頑張つてる自分を見てほしがつてるようになつて、微笑ましいぞ」「や

田から鱗が落ちるとは、まさしく今の状況のことを言つんだる、

そうだ。梓はよっぽどのことじやない限り、俺に「助けて」「なんて言わない。俺に、頼つたりなんかしない。

いつだつてあいつは、自分の力で頑張つてきた。

全部が中途半端な長さで折れたシャー芯で、何度も補充しながらテストを受けていた。

自分に関係のないラブレターを、わざわざ全部返しに行つた。

おごりもつて言つたのも断つて、まずいカップ焼きそばを完食した。

ああ、本当に俺があいつには必要だなんて、自惚れにもほどがあつた。

梓が強いつてことくらい、昔つから知つていたはずなのに。

「……俺はいつも、余計なお世話ばっか焼いてたつてことか」

「いやいやいや！ なんでそんなネガティブな方向に落ち着くんだ！」

俺が言いたいのは、そういうことじやねえー！」

先走つて鬱になつた俺を、大樹が止める。

「司、俺が言いたいのは神薙はお前に認めてほしいんじゃねーかつてこと」

「認める？」

「そうだ。ほら、神薙つて、不幸体質なだけであつて、ドジでも運

痴でも頭が悪いわけでもねーじゃん。むしろ、不幸さえなればあいつ、めちゃくちゃパーフェクトな人間だつて、司、お前が言つてただろ？」「

そうだ。梓は四年前まで、不幸になる前までは、勉強もスポーツもできて、破天荒すぎる性格だから、大人受けは良くなかったが、その底抜けの明るさがクラスの中心だった。

そして、いまでもあいつは俺より成績はいいし、運動神経もいい。ただ、それを上回るほど不幸なんだ。

「俺らは神羅イコール不幸ってのが定着してるけど、お前は違うじゃん？ 神羅が不幸な奴つてだけじゃなくってこと、知ってるんだろ？

だからこそお前に、認めてほしいんじゃねーの？ 不幸なのを、かわいそーかわいそーって言つて、フォローされるんじゃなくつて、不幸でも、頑張つて一人で成し遂げたことを見てもらつて、褒められて、……助けてもらつばかりじゃない、対等な立場になりたいんじゃねーの？」「

……さつきのが「目から鱗が落ちる」なら、今はなんて表現すべきだろ？「

目に長年こびりついていた錆が、洗い落とされるとでもいいくべきか。

そうだ。

俺は、梓が頑張つてゐるのに、梓の頑張つた成果を見なかつた。梓が頑張ろうとしているのを、横からしゃしゃり出て、あいつをかわいそうな子扱いして、何もさせなかつた。

俺は、俺の自己満足のために、あいつのすべてを貶めた！

梓が、俺にはわからないというわけだ。

自分にとつて都合のいいものしか、俺は見ていなかつた。

「……おーい。またお前、ネガティブスパイラルにはまつてないか？」「

「はまるも何も、ネガティブになるしかねーよ。……本当に、何も

わかつていいない自分が嫌になる」「

俺の返答に、大樹は仕方ないと言いそうな苦笑をする。

「ああ、本当にお前は何にもわかつてねーよ。

お前のこと嫌いなら、昨日、全身ずぶ濡れのまま、お前を

かばつたりなんかしねーだろーよ。」「

………… そうだな。

まつたくもつて、その通りだよ。

#### 4・本当の被害者

謝りう。

正直言つて、何を謝ればいいのかはわからないが、とにかく土下座でも何でもして、謝り倒す！

そこまでしたら、さすがに梓も相手にせざるおえないだろう。

そして、訊こう。

お前が何故、あんなにも辛そうに笑つて、「見捨てろ」なんて言ったのかを。

一体梓は俺に、何を理解してほしかったのかを。

教えてくれ、梓。

俺は、お前と一緒にいたいんだ！

そう決心して、放課後俺は、梓がトイレ掃除から帰つてくるのを教室で待っていた。

梓がいくらなんでも無視しようがないようこそ、窓際の一一番前の席、梓の席で。

「よおー、司。今日も嫁を待つてたのか？ ケンカ中でもあつつなー」

今林がまた茶々を入れてくるが、無視だ、無視。

「ほんと、お前は昔から神薙大好きすぎるよなー」

無視しようにも、どうしたってこいつの言葉は、俺を苛立たせる。落ち着け。無視しろ。外でも眺めてろ。

俺は少しでも今林から意識を外すために、窓に目をやる。

『司』

「！？」

意図しない方法で、それは成功した。

今林は長々と嫌みやからかいでも言つてたんだろ？ が、そんなもん俺の意識からは、綺麗さっぱり排除された。

窓ガラスに映つた俺の顔を見た瞬間、そして窓ガラスの「俺」が、

話しかけてきた時から。

窓ガラスに映る俺は、確かに俺の顔だが、今の俺がしているわけのない表情をしていた。

瞳は全てを見飽きたように冷めているくせに、口には嘲るような冷笑を浮かべ、「それ」は言つ。

『この不幸は、私の管轄外だ。『彼女』の元へ行つてやつたらいどうだ?』

頭が、真っ白になつた。

気が付いたら俺は、今林を突き飛ばして走つていた。

梓が掃除をしているはずの、西校舎1階の女子トイレまで。

「桜野クン、かわいそう。梓の世話をばかりで」

「そーそー。かつこいいし、性格もいいのに、梓の世話をばかりで、彼女も作れないなんて」

「梓も、あんまり甘えすぎない方がいいよ。そのつまびらか、彼女も作れないなんて」

愛想尽かされちゃうから

下品な笑い声が、輪唱した。

……何なんだ、これは?

女子トイレの中で、女三人が掃除用具片手に梓を囲んで、そんな事を話してた。

俺が、かわいそう? 梓のせいで、彼女ができない? いつか絶対、愛想を尽かす?

……こいつらは、一体何を勝手に言つてるんだ?

梓……、どうして何も言わないんだ!?

いつもの、マシンガントークはどうした? ビジビシ、デッキブ

ラシを握りしめて、黙つて俯いてるんだよ!…

「ねー、梓。悪いんだけど、便器洗うの一人でやつてよ」

「そうだねー。梓と一緒にやるの怖いもん」

「便器の水が、逆流してきたりしてー!」

……違う。そんなことは起きない!

梓の不幸は、「他人」を巻き込まない！ 梓の不幸は梓に対しての「罰」だから、他人を巻き込むような大きな不幸は起きない！ むしろ、他人がそばにいれば、梓自身の不幸も防げるのに！

「……うん」

どうして、どうして文句も言わずに頷くんだ！

どうして……どうしてなんだ、梓？

その三人は、お前の「友達」じゃなかつたのか？

どうして、お前の「友達」が、お前をボロボロに傷つけて笑っているんだ！！

「あずさあつ……」

「！？ 司！？」

耐えられなかつた。我慢できなかつた。

俺は喉が裂けそうなぐらいに叫んで、中に入った。

「え？ ちょっと！ 桜野クン！！ ここ女子トイレ！」

「あ、梓に用なら、ちょっと待つてよー！」

女子トイレだらうと、どこだらうとどうでもいい。

俺は、梓を囮つている奴らを突き飛ばし、梓の腕を掴む。

「きやあ！」

「冷たい！ ひ、ひどいよ、桜野クン！」

「……ひどい？」

自分でもぞつとするほど、冷たい声が出た。

「これくらいがひどいのなら、お前らが梓にしていたことは何だ？」

俺が、自分たちの会話を聞いてたと気づき、三人は顔を引きつらせた。

俺の腕の中の梓も、ひどくショックを受けたような顔をする。

「……どうして？ どうしてお前が、そんな顔をする？」

お前は被害者なのに！ どうしようもなく、傷つけられたつてい

うのに！

「あ、あのね、桜野クン。さつきのは冗談だから！」

「そうだよ！ 本当に梓一人で掃除なんてさせないよ！」

媚びる言葉がうつとおしい。『冗談？』『冗談だつたら何を言つてもいいと思つてゐるのか？

頭にのぼつた血が沸騰する。

殺してやりたい。

梓を傷つけたこいつらを！ その材料になつた、俺自身も！－！

「……司！」

梓が、俺の腕の中で叫んでくれなかつたら、俺は、間違いなくこいつら三人を殴りつけていた。

「……やめて。司、やめて。

いいの。気にしてないから。私は何も気にしてない！ 直美や果歩達の言つとおりだから！

……だから、やめて。……私の友達を、怒らないで「友達？」

お前は、こんな奴らを友達といつうのか？

お前の不幸をだしに、掃除を押し付けて、嘲つたこいつらを！－！

「……こいつらの、言つ通りなんかじゃない」

掌に爪が刺さるほど拳を握り締めて、怒りを抑えつけて、せめてこれだけは訂正する。

「俺は、かわいそなんかじやない」

これだけは、訂正しなくちゃいけない。

「俺は、お前の世話を好きで焼いてるんだ。全然、かわいそなんかじやない」

『そうだな。

かわいそなんのは、司、お前じやない』

トイレ内に取り付けてある鏡が、そこに映る俺ではない俺が語る。

『かわいそなんのは、お前のせいだ』『罰』を受ける羽目となつた、

神薙梓だ』



## 5・罰あたり者

「「ごめんなさい」

「「ごめんなさい。ごめんなさい」」

「「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい」」

暗闇の中、ひたすら謝った。

割れた鏡をパズルのようにつなぎ合わせながら、鏡の切つ先で手は血まみれになりながら。

俺は、俺のせいで梓が割つたしまつた御神体の鏡を、ひたすら謝りながら、もう戻らないものを直そうと、必死になつていた。

梓が、急な高熱を出して、入院してからずっと、一晩中。

「ごめんなさい。俺が悪いんです。入っちゃいけないって言われてたのに、俺が入つて遊ぼうって言つたんです。俺が、ふざけて梓の髪を引っ張つたから、梓が落としちゃつたんです。梓は、ちゃんと正直に謝ろうとしたのに、俺が黙つてよつて言つたんです。

梓は何も悪くないんです。悪いのは、全部俺です。俺の方なんです

す

原因不明の高熱。何をしても、治まらない症状。真っ蒼な顔色。

天罰だとしか、思えなかつた。

だから俺は、ひたすらに謝つた。

「天罰は俺に落してください。何でもします。お願ひします。許してください。梓を許してください。ごめんなさい。ごめんなさい……」

…

病室で、家族とたくさんの医者や看護師に囲まれて、息も絶え絶えに梓は言つた。

『司……、私……死んじゃうのかな?』

強い彼女が、そう言つて泣いた。

いつもいつも、女みたいな顔で、祭りのとき女手が足りないから

つて、巫女の格好でお神樂させられて、今林にからかわれて苛められていた俺を、守つて、かばってくれていた強い梓が泣いた。

「……お願い……します。……梓を……助けて……。」

梓を、殺さないで

『ならば、お前に一つの覚悟を問おう』  
「!?

誰もいなはずの堂に、声が響いた。

その声は、まぎれもなく俺の声だつた……。

「だ、誰! ? どこ! ?」

『ここだよ、司』

その声は、俺の血で汚れた、粉々の鏡から聞こえてきた。いくつにも割れた鏡に映るいびつな俺は、確かに俺の顔だつとうのに、全くの別人だつた。

十歳の子供とは思えないほど冷めた目をして、冷たく笑う俺が、そこにいた。

『司。原因は確かにお前だ。けれど、壊したのは彼女だ。だから、彼女も罰を受けなくてはならない。』

今夜、彼女が助かつても、これから彼女は、ささやかながらも一生不幸になつてしまふが……、それでも、彼女を生かしてほしいかい?』

鏡の中の自分が、いたぶるように笑つて訪ねたのは、皿に焼き付いている。

当時の俺は、鏡の俺が言つてゐる意味をよく理解していなかつた。けど、理解していてもいなくとも、答えは一緒。

「いい! それでいい! ……俺が、守るから!

俺が全部、守るから! 梓を不幸から絶対に守つてやるから! ……」  
意味をよく理解していない、考えなしなセリフだつた。

でも、今でもこの気持ちは、この願いは変わらない。

守りたい。どんな不幸からも、梓を。梓だけを

『そうかい。……なら、もうひとつ、覚悟なさい』

鏡の俺と、俺の顔が全く逆の感情で歪んだ。

鏡は狂喜の面に。

俺は絶望に……

「俺にはわからないよ、梓」

女子トイレから梓を引っ張り出して、人気のない体育館裏に連れてきて、俺は言った。

謝り倒すつもりだったけど、今は何も謝れない。

心がずっと、ざわついている。苛立つてゐる。

梓を傷つけたやつに、そいつらをかばう梓に、何も分からぬ俺自身に……そして、梓をこんな目にあわせて、一ヤニヤ笑い続ける「あいつ」に。

「梓。どうして俺に、『見捨てる』なんて言つんだ？俺は、お前のことを見捨てるなんてできない。」

梓は黙つて俯いている。

……こんな梓、見たことない。

どうして、どうしていつもみたいに、訊かれていないことまでも何でもかんでもマシンガントークで、まくしたててくれない？

俺は……、俺は本当に、君のことを何にもわかつていのいか？

十年、一緒にいるの。

十年、ずっとずっと君のことが

「だって、……厭なんだもん」

梓のつぶやきが、蚊が鳴くよつなか細い声が聞こえた。

「え？」

「……だって、厭なんだもん！ いつか、……いつか司に愛想尽かされて、見捨てられるのは嫌！」

それなら、今、見捨てられた方がいい！ いつか失つくらになら、今、なくなつた方がいい！！

駄々をこねる子供のように、梓は叫んだ。

涙をこらえて、唇を噛みしめて、血を吐くよつな悲痛な声で、い

つそ泣いていてほし〜くらい、辛そうに。

「司には、……司には、わかんないよ！ 私が、どれだけ司がいなくなつてしまふのを、怖がつてゐるかなんて！

昔は……司が私を頼つてきてくれたけど、今は、私、何にも出来ないもん。司がいなくちゃ、何もできないもん」

何も、できない？

ちゃんと、できるじやないか。

今日も、昨日も、今までずっと。

「直美たちの言つ通りだよ！ つ、司は、今は、好きでやつてゐるのかもしけないけど、でも、好きな子ができたら、どうするの？」

私ばつかり見ていられないじやん！ 私のせいで、司に彼女ができるのは厭だよ！ でも、彼女がてきて、見捨てられるのはもつとやだ！

……何で、どうしてこんな面倒くさい私の相手、ずっとするの？ わかんないよ！ 私に司の気持はわかんないし、司もわからないよ！

いつか、失うかもしない、見捨てられるかもしぬない関係に、ずっとビクビク怯えてる私の気持ちなんて！！」

ああ、そのとおりだよ。

ずっとずっとわからなかつた。

そんなことに、おびえていたなんて。こんなにも、君が不安だつたなんて。

だつて、考えもしなかつたから。

ずっとずっと大好きな君を見捨てるなんて、梓以外の女の子を好きになつて、梓を見捨てるなんて、俺には考えもつかなかつた。

「梓」

平均よりも小柄な梓を、抱きしめた。

四年前は俺の方が小さかつたのに。

「俺は、泣き虫だったよな？」

「はあ？」

「お前の後ろに隠れて、お前に守つてもいいのが当然で、甘えることを恥ずかしいと思つていい、クソガキだった俺と、どうしてお前はずつと一緒にいてくれた？」

「え？」

「……それと、同じだ。俺は、お前が俺を見捨てなかつたのと同じで、俺も、何があつてもお前を見捨てはしない」

「ごめん。梓。卑怯な言い方をして。

まだ俺は、勇気を持てない。好きだつて言えない。けど、わかつてほしいんだ。これだけは。

「頼むから、お前の世話を焼かせてくれ」

「」の罰あたりものを、そばにいさせてくれ。

「……彼女、できないよ。私の世話をばっか焼いてたら

「じゃあ、お前がなれ」

「は？」

「結婚しろ」

「何いつてんの？」

梓が涙を引つ込めて、全開全力で呆れて言つ。

「うん。俺も、もはや何言つてるのか、自分でもわからん。

「小学生の時からの約束だ。もういっそ、結婚しよ。そうしたら、

「世話がどうこう、見捨てる云々なんて考えずにする」

「私の悩みや葛藤を、そんな冗談で片付けるなーーー。第一、結婚

しようなんて、一度も言つた覚えないわーーー。」

「うおつ！？」

某格ゲー必殺技級のアッパーを飛ばしてきやがつたので、あわてて抱擁を解き、逃げる俺。

「……いい考えだと思つたんだけどな

「どの辺が？ あー、本当になんか、悩んでた私が馬鹿みたいじゃん。司のアホー、ボケー、マキシマムー！」

「意味わかんねえよ

梓にいつもの調子が戻つて、ホッとする同時に、胸の奥がえぐられるように痛んだ。

……ああ、やっぱり。

わかつていたけど、やっぱり梓は思い出さなかつた。

「大きくなつたら、結婚しよう」

いじめられて泣く俺に、君が確かに言つてくれたあの約束を。わかつていたのに……、身勝手にも俺は、いつか思い出してくれないかと期待している。

守つてくれなくていい。ただ、確かにこの約束をしたことを、俺たちが「恋人」だつた時を、思い出してもほしいと。

「……ねえ、司」

梓が、淡く微笑んで訊いた。

「本当に、司はいいの？」

……何を？ なんて、訊くまでもない。

「俺は、梓を守れないことを後悔しても、梓と一緒にいることを、後悔なんてしたことない」

だから、どうかこれからもそばにいたさせてくれ。

たとえ、君がほかの誰かを好きになつても……

俺が恋するのは、きっと一生君だけだから。

「……ありがとう。司」

君は笑つて、ほんの少しだけ泣いた。

うれし泣きかもしれないし、まだまだ不安なのかもしれない。何かがどうしようもなく、悲しいのかもしれない。

それでも彼女は、笑つて泣く。

俺も泣きそうになつたけど、根性でこらえた。

俺が泣いたら、梓は泣けない。泣くのを俺以上に我慢する。

それをわかつてるから、俺は四年前、もう泣かないと決めたんだ。そしてまた、決心する。

絶対に、泣きはしない。



## 6・一度目の初恋

机の中から、鏡を取り出す。

四年前、俺のせいで梓が壊してしまった御神体。

俺が血まみれになつて、セロテープをべたべた貼つて稚拙に直した鏡を。

「……何のつもりだつたんだ？」

『何が不服なんだ、司？ せつかく、愛しい女子を助けられたというのに？』

鏡に映る、俺ではない俺がからかうよつて言つて。

……四年前、俺が泣きながら、謝りながら鏡を直して、いた時に出会つてから、こいつは時々、鏡や何かに映つた「俺」の姿を借り、俺に話しかける。

俺以外にはだれにも聞こえない声で。

「……こいつが「神」なのかどうかは、俺にはわからない。

こいつ本人も、「神」だと名乗つたことはないし、はつきりこいつてこいつは性格が悪すぎる。

神よりも悪魔や悪霊に近い、絶対。

「何で、俺に梓を助けに行かせた？ そんなこと、今まで一度もなかつただろ？」

『言つただろ？ あの不幸は、……友人と思つていた者に、言葉でいたぶられ、嘲られるのは私の管轄外だ。ただでさえ、お前のせいで不幸となつた彼女が、これ以上理不尽な不幸は哀れだと思つたからだ』

本当に憐れんでるなら、そのニヤニヤ笑うのはやめりー。

「……そう思つなんなら、もう、梓を不幸にするのはやめてくれ。するんなら、俺を不幸にしてくれ」

もう、何度目かわからない懇願。

答えは、いつも同じ。

『それは利けぬ願いだな。

確かに、原因はお前だが、彼女は無罪といつわけではない。……

それに、彼女が不幸でなくなつたとしても、彼女の罪をお前が背負つても、失つたものは、お前の罪は消えぬよ、司』

わかつてゐる。

わかつてゐるよ。

もう、戻らない。あの口、失つたものは。

俺の「恋人」は、もう戻つてこない。

四年前のあの日、鏡の俺は楽しくて楽しくて仕方がないという顔で、俺に言った。

『彼女を助ける代償として、彼女はお前への『恋心』を失うことを見悟なさい。

わかるかい、司？ これは、君への『罰』だ』

目の前が、真っ暗になつた。

理解したくないのに、理解してしまつた。

それはつまり……「梓」は助かつても、俺のことを好きになつてくれた、「結婚しよう」と言つてくれた「恋人」は、もう戻つてこないということ。

怖かつた。

助かつても、俺のことを好きになつた梓が、俺のことをどう思うかが心配で心配でたまらなかつた。

俺のせいで、こんな目に会つたんだ。

嫌われるかもしれない。もう一生、口もきいてもらえないかもしない。

『どうする？ お前は、自分のことを憎むかもしれない彼女を、不幸から守つて生きていいくのかい？

それとも、お前を愛してくれている彼女のまま、看取るかい？』

正直言つて、心がぐらついた。

梓に嫌われて生きていくぐらいなら、梓に好かれたまま死んでも  
らつた方がいいかもしないと、本気で思った。

でも

『「ごめんな。……同、……」「ごめんなさい』

病室で、熱にうなされて、呼吸冴えもままならない梓が、泣いて  
謝つて、俺に語った言葉が蘇る。

『司のお嫁さんになれなくて」「ごめんなさい』

「梓が生きていてくれたら、もう俺はそれだけでいい……！」

叫んだ。

泣いて、叫んだ。

嘘つぱちの言葉を。

本当は嫌われたくない。好きでいてほしい。それが無理なら、いつそ失った方がいい。

けれど……、でも……、どんなに好かれていても……、あんな最期は厭だ！

「ごめん。梓、本当に、身勝手な俺でごめん。

死んだ方がましかもと、勝手に思つて、俺の自己満足のために、こんな不幸を背負わせて……

大好きな君を、傷つけてばっかりな俺でごめん。

そんな俺を、好きになつてくれて、ありがとう。

「……まあ、いい。とりあえず、一応礼は言つとく。教えてくれて、ありがとう」

『どういたしまして』

それだけ言つて、俺は机の中に鏡を片付けようとしたら、鏡はぼそりとこんなことを言い出した。

『そういえば、司が彼女を見捨てないのは、昔の司を彼女が見捨てなかつたのと同じと説明したが、彼女はどう取つたんだろうな？』

「……さあな」

あれは、卑怯な説明だ。

俺が梓を見捨てないのは、梓のことが好きだからだと言えなかつたから、そういうただけで、「恋心」を失った梓には、なんであんな甘つたれな俺を見捨てず、そばにいてくれたのかはきっと、梓にとって大きな謎だろう。

そんな風に俺が言うと、鏡の方は少し笑つた。

何かを企んでそうな裏のある笑みはいつも通りだが、人の心をえぐつて貰いて楽しむような笑いではない。ほんの少しだけ、いつもより好意的に見える笑みが、逆に不気味だ。

「……なんだよ、その笑いは？」

『ふふ……。司、そういえば言つた覚えがないが、私はな、神薙梓から、『恋心』という花は、確かに刈り取つた。一度刈り取つた花は、もう枯れるしかない。戻りはしない。

……けれども、私は『思い出』という根は、丸い」と残しておいてあるんだがな』

？ どういう意味だ？

『司、彼女は恋心を失つたが、お前と過ごした日々は、何一つとして、失つていらないんだよ。

『結婚しよう』だの『愛してる』などの睦言を言つたことは、忘れているかも知れんが、そう言いたくなつたきつかけである出来事はすべて、何一つ欠けることなく覚えている』

……覚えている？

俺たちが、「恋人」だつたことは覚えてなくとも、「結婚しよう」という約束は、なかつたことにされても、俺たちがそうなるきっかけは、あいちは、梓は覚えているのか？

『刈られた花は、もう元には戻らない。だが、根が残つていれば、時間をかけ、丹念に世話を焼けば、またもや咲くかもしけんな。前とは形が違えど、同じ花が……』

急激に、顔が熱くなる。

思い出すことはなくとも、それでも梓はまた俺を……

俺に、いつか見捨てられるなら、今見捨ててほしいと言ったのは……、彼女ができるて見捨てられるのは厭だと叫んだのはもしかしたら……、嫉妬？

つて、先走りすぎだ、俺！

『可、顔が赤いぞ』

「ひむさいーー！」

鏡だつていうの、俺とは違つて涼しい顔で言つそれを、机の中にしまいこんで、俺は床に膝を抱える。

あー、やばい。

昼間とは全然違う意味で、頭にのぼった血が沸騰する。心臓が口から飛び出しそうなぐらい、ドキドキする。

どうしよう。うれしくてたまらない。

この、一度目の初恋が、もしかしたらかなうかもしれないと思つた

が。

## 6・一度目の初恋（後書き）

昔、漫画で描いた話を、小説に直してみました。  
一日クオリティの駄文を読んでくださいて、ありがとうございます。  
もしよろしければ、感想もお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3826j/>

---

罰あたり者の恋人

2010年10月8日14時30分発行